

—祈りと信仰のまち京都—

(1) 本山と聖地

京都は、延暦13年(794)の平安遷都より、明治になって東京遷都が行われるまでの間、首都機能を有していたため、仏教の各宗派の総本山や大本山が多く、寺格が高く威厳にみち、荘厳かつ壮麗な寺観を誇ってきた。清水寺や教王護国寺(通称、東寺)、本願寺(通称、西本願寺)、天龍寺などの世界遺産をはじめとして、南禅寺や知恩院などがその代表として知られている。他にも、「西国三十三所」に代表されるような霊場などもあり、京都はそれらの聖地を目指して来訪する多くの人々を迎えてきた。

また、古来より京都に存在する上賀茂神社や下鴨神社、全国の多くの稲荷神社の総本社である伏見稲荷大社など、日本を代表する神社が多く存在する。これらの神社は、「神山」や「糺の森」といった、人々の信仰の対象や社叢としての豊かな自然環境とともに、古くから人々の信仰を集めてきた。

これらの本山などの聖地への参詣は、名所見物も兼ねており、「宗教の総本山」としての機能を歴史的に培ってきた京都の歴史を示す一つの側面と言える。

ここでは、京都が持つ「宗教の総本山」としての位置付けによって形成されている歴史的風致について、その背景と、代表的な例を示していく。

ア 背景

幕藩体制下に成立した檀家制度とそれを受けた宗門改は、当時の日本の人々のほぼ全てを仏教徒と化した。それらの人々が信仰する本山のあるところが京都であった。さらに、常日頃は拝むことのできない秘仏として、本尊や什宝の開帳が行われるようになり、人々がこれに参詣するという制度が定着していき、「本山まいり」に拍車をかけた。これにより、東西本願寺をはじめ諸本山の近辺や、街道筋の誓願寺周辺、清水寺に連なる寺院付近には、旅人のための宿が建ち並ぶようになった。

また、「巡礼」という信仰があり、最も歴史のあるものに「西国三十三所観音霊場」と呼ばれる、近畿2府4県他に点在する観音霊場を巡るものがある。そのうち京都には番外を含めて8箇所があり、多くの善男善女が訪れた。これになぞらえて、近世から盛んになった「洛陽三十三所観音」や「弁才天まいり」などもあり、近世に入って成立した「四十八願寺」は、名釈迦、名薬師、名弥陀、名不動、名地藏

などを巡るものとして、18世紀ごろから頻繁に行われた信仰である。

京都市内には、平安遷都より形成されてきた名所や旧跡が数多くあり、また四季折々の自然を楽しむことができる多くの景勝地があったこともあり、「都名所図会」等の出版によって、京都への旅に多くの人々を駆り立て、本山まいりや巡礼は、名所見物という娯楽を兼ねた信仰の旅として定着していった。

イ 具体事例

(7) 本願寺への本山まいりと本願寺界限

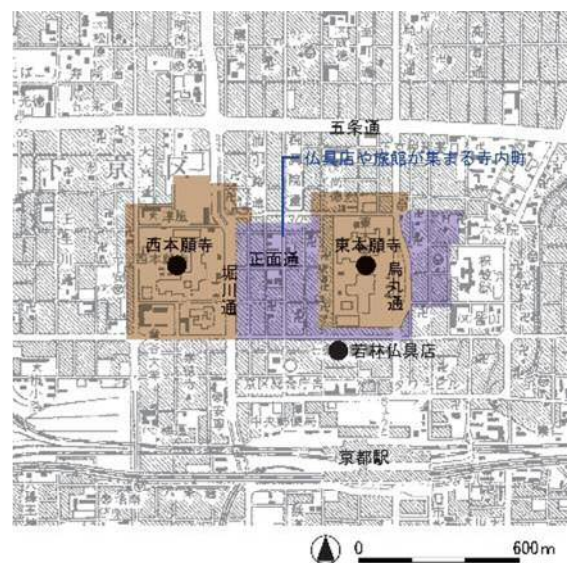


図2-4 本願寺と本願寺界限

東西本願寺への「本山まいり」は江戸時代から行われており、現在でも両本願寺は「本山まいり」の盛んな寺院として有名である。

特に報恩講(御正忌報恩講)は、東西本願寺で行われる年中行事の中でも最も重要で荘厳な法要である。報恩講とは、浄土真宗の宗祖親鸞の年忌法要で、没後33年後の永仁2年(1294)に、本願寺第三世覚如が「報恩講式」を撰述したことを起源とし、それより現在に至るまでもっとも重要な法会として、本山及び末寺で厳修されている。東本願寺(真宗大谷派本山)では11月21日～28日、西本願寺(浄土真宗本願寺派本山)では1月9日～16日の間に行われ、東西本願寺やその界限では、溢れんばかりの参拝者を迎える。

天正19年(1591)、豊臣秀吉の命により京都六条堀川へ本願寺が移転し、周辺には、坊官や